

ゲーテと歩く古代ローマ

有川 貫太郎

ゲーテのローマ滞在は、1786年11月から翌87年2月（第一次）、その後ナポリ・シチリアを旅行したあと、87年6月から翌88年4月まで（第二次ローマ滞在）の、つごう約15ヶ月である。その詳細は彼の「イタリア紀行」によって知ることができる（もちろん、そこに書かれなかったことにも意味はあるが、今はそれには立ち入らない）。そこからの引用は、日付を簡略化してなるべく本文中に入れた。例えば（86.11.7）は1786年11月7日のことである。¹⁾

世界の首都

ヨーロッパのメトロポールは、ロンドン、パリ、ベルリン等々それぞれにつきぬ魅力を備えているが、その都市像の中核は近世以降に発展・整備されたものであり、その中に（教会の尖塔がシルエットを作るように）中世の趣きがアクセント的に融合している姿である。しかしローマの場合は、それにまして古代の遺物が都市像の中核をなし、それに中世（キリスト教）と近世（ルネサンス・バロック）の文化とが渾然一体となって都市像を形作っている点でユニークである。そういう意味でたしかにローマは他のいかなる都市とも比較されえず、まさに「世界の首都」という名前に恥じないだろう。ゲーテにとっても、「世界の歴史は全部この地に結びついており、私がローマの土を踏んだ日から、第二の誕生日、真の再生が始まっ」たのであった。（86.12.3）

ローマの起源とその後の歴史については読み切れないほど多くの本が書かれているので（学生諸君は）各自それらのいずれかに当たっていただきたいが、二つのことを確認しておきたい。まずそれらの記述のソースは多くを、歴史家

リヴィウス（前 59-後 17）の“Ab urbe condita”「町（ローマ）の建設より」²⁾ によっていること、次にそのローマ建国の祖はトロヤ戦争（ほぼ前 1200 年頃のことと考えてよい）による祖国滅亡の中を生き残り、一族とともに「新しいトロヤ」の建設をめざして西の地中海世界へと船出したアエネーアスであること。長い旅路の末に、イタリアはラティウムの地に新天地を見いだし、そこに「新しいトロヤ」の基礎が築かれた、とローマ建国の神話は伝える。この事情については、ヴェルギリウスの叙事詩「アエネーイス」を繙くのがよいが、他にもこれを読みやすく記述した本には事欠かない。³⁾ いずれにせよそれから数百年を経て、（間接的に）この血筋をひく双子の兄弟ロムルスとレムスによって今のローマの起源となる町が築かれた。前 753 年のこととされる。この二人が幼時、狼によって育てられたと伝えられる、そのありさまを象った彫刻も人々になじみのあるところである。（この像のオオカミはエトルリア時代の雄健な息吹を伝えるものであるが、乳を吸う双子はルネサンス時代に付加されたものであるという。）カンピドーリオ（＝カピトリウム）の美術館でこの像を見ることができる。

カピトリウムの名前をあげたついでに、ローマの七丘についてふれておきたい。現在でもローマ市内を歩くと諸処になだらかな起伏を感じるところがある。人家や建物に覆われた現在ではそれほどの高度は意識されないが、樹木が覆っていた原初のころはそれなりに高い「丘」として意識されたことであろう。（その姿を想像復元した絵図もいくつか眼にすることができる。）⁴⁾ テベレ川の湾曲する内側、小高くそびえるいくつかの丘とその間の低地に、ローマの町が発展してきたのである。Capitolium とは、それらのなかでも主要な、いわば「頭」とも目されるところ、最も神聖とされた場所で、古来ここにはローマを守護するユピテルの神殿がそびえていた。ローマ筆頭の丘というこの伝統は今にいたるまで続いており、カンピドーリオはローマ市の最も由緒ある建物群が置かれているのである。他の六つの丘をラテン語名で挙げると、時計回りに、Quirinalis, Viminalis, Esquiliae, Caelius, Aventinus, Palatinus である。パラティーヌスには皇帝や貴顕の館が並び、英語 ‘palace’ などの語源でもある。語源ついでにもう一つ。ユピテル神殿の横には后である女神ユーノーの神殿もあった。ユーノーにはその働きの局面に応じていくつもの呼び名があるが、「警告する」女神として、Juno moneta とも呼ばれていた。彼女の神殿は貨幣鑄造を行う場所でもあった。money はここに由来する言葉である。

周期的にテベレ川の氾濫に襲われる「不利な地勢」(87.1.25)の土地に、「牧人や賤民がまずここに居を定め」(同)、草葺き屋根の小屋が立ち並ぶ程度の集落であったローマが、サビニー系の王三代、エトルリア系の王二代ののち、最後の王タルクイニウス傲慢王を追放し、一年交替の二人のコンスルによって統治される共和制となったのが前509年。次第に近隣の諸国(部族)を圧伏し、イタリア半島全体を制圧したといえるのがおよそ前270年頃。次に地中海世界へと力を伸ばそうとすれば、そこは元来から海の民たるフェニキア人の国カルタゴの支配するところで、これとの衝突は避けがたいことであった。ハンニバルにはさんざんに苦渋を味あわされる局面もあったが、前後三回、つごう120年におよぶポエニ戦争を制してついに地中海の覇者となる(前146年)。それからの約100年は、今度は国内の権力をめぐる内乱の時代となる。これを一応制したユリウス・カエサルも前44年には反対派の手に倒れた。その後の混乱の中から抜け出たのがオクタヴィアヌスのちあらためアウグストゥスで、彼をもって最初のローマ皇帝とする(前27年)。以後、紀元98年から180年までの五賢帝時代を頂点として、次第に爛熟衰退の歩みをたどり、帝国の東西への分裂を経て西ローマが終焉を迎えるのが紀元476年。と、今ひと息にたどったここまでの時代が「古代ローマ」ということになる。

(西)ローマは滅びたが、その後もローマが世界の首都と呼ばれたのは、キリスト教の中心地となったからである。ヴァチカンをはじめとして、おびただしい数の教会や聖地が巡礼者、旅行者を待ち受けた。また十五世紀から十七世紀にかけてはルネサンス・バロックの文化もこの町に多くの遺産を残した。

ローマはこうした三層の文化からなる世界史的求心力によって常に多くの旅人を引きつけてきたが、今回はその中のキリスト教、ルネサンス・バロックのローマは割愛し、今に残る古代ローマに焦点をあてて都市像を見る。しかしそれだけのことなら、すでに多くのガイドブックのたぐいに必要にして十分な解説や図版を見いだすことができるので(この分野では例えば Michelin のグリーンガイド・シリーズ⁵⁾はひとつの理想像と言えるのではないだろうか)、ゲートの「イタリア紀行」を手引きとして古代ローマを歩こうというのが今回の趣旨である。

十八・九世紀には、ヨーロッパの知識人たちの「イタリア・ローマ旅行熱」の大きなピークがあった。なかでも貴族子弟の修学旅行とも言うべき「グラン

ド・ツアー」のハイライトとして、多くのイギリス人たちが峻険なアルプスを越えてローマを訪れた。⁶⁾ したがってイタリア各地でイギリス人はなかなか目をひく存在であったようで、さながら現代の日本人旅行者のごとき社会現象であったかもしれない。ゲーテのイタリア紀行にも多くのイギリス人が姿を現している。教養修得を目的として、多くの危険をものともせず大陸からイタリアへと向かうイギリス人は、その道の信頼できる先達と目されもしたであろう。ゲーテも、「確実な知識をもち、美術、歴史に精通したイギリス人に案内されてイタリアへ行ってみたいと切に願った」ことがあったと言う(86.11.7)。ローマを訪れる人々の目的のひとつが古代彫刻を眼にすることであったが、これは同時に古美術商という「ビジネス」も産み、それに関わるイギリス人も少なくはなかった。ゲーテは、そういう一人、Jenkins なる人物の別荘に招かれて、秋の数週間をローマ郊外の風光明媚な保養地カステル・ガンドルフォで過ごした。このとき一人の「美しいミラノ女性」に英語の手ほどきをすることを契機に心が通じた。ゲーテは無限のなつかしみを込めてこの日々を回想している(87.10.通信)。

さて、イタリア詣での波に戻るが、それはドイツでも劣るものではなく、例えばゲーテの父 ヨハン・カスパーも三十才のときイタリアを訪れており(1740年) 彼にも「イタリア紀行」の著がある。⁷⁾ 少年ゲーテはその父が居間に掛けてあったローマの全景図を見て育ったのであったから、彼がローマの地を踏んだとき、たしかに初めて目にする街の姿とはいえ、「すでに昔から知っていたものが、いま並びあってぼくの前に立って」おり、「なにもかもがぼくの想像していたとおりだし、しかもすべてが新しい」のであった(86.11.1)。そしてさらに言えば、後述するように、われらがゲーテの息子アウグストも遍歴の終着駅としてローマに向かい、ついにそこで不帰の客となった。

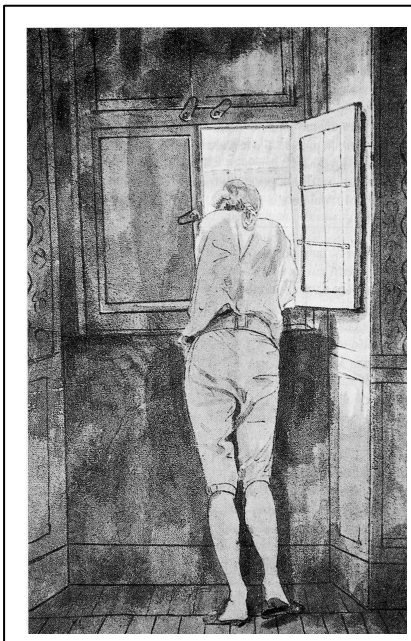
ワイマルの宮廷に招かれて十年、さまざまな行き詰まりに陥っていたゲーテにとって、イタリアへの旅はそれを一挙に打開しようとする方策でもあった。イタリアの地を踏むこと、「この数年間それは一種の病気のようなものとなり、それを癒すことのできるのは、この地を実際に眺め、この地に身をおくこと以外にはなかった」(86.11.1)。1786年8月28日、カールスバート(現チェコ)の保養地で、親しい人々に誕生日を祝ってもらったあと、ゲーテは誰にも告げることなく、「抵抗しがたい欲求でぼくを引きつけたその中心点」イタリアに向か

っての出発を敢行する。旅は南ドイツを経ておもむろに南下してアルプスを越え、イタリアに入る。そして「ヴェローナ、ヴィチェンツァ、パドヴァ、ヴェネチアなどはよく見たが」(ヴェネチアは17日間)ローマが近づくにつれてぐんぐんと引力は増し、「フィレンツェにはわずか三時間滞在しただけで」ひたすらローマへと急いだ。そして1786年10月29日、北の門ポルタ・デル・ポポロをくぐった(北からの旅人はおおむねこの門を通してローマに入った)。「そうだ、ぼくはついにこの世界の首都に到達したのだ!」(11月1日記)

コルソ通り

ポポロ門からまっすぐにカピトリノの丘の麓、ヴェネチア広場に延びる道、それがヴィア・デル・コルソ、現代では最も繁華な通りの一つであるが、古代にはカンパス・マルティウスの原をつききって北へ向かう軍用道路ヴィア・フラミアであった。コルソとは、競馬の「コース」の意味で、15世紀に法王パウロ2世がここで競馬を催したことにちなむという。その名残りはカーニバルの一大イベントとして松明をつけた馬を走らせたことにも残っていると思われる。ゲートは「イタリア紀行」の中で「ローマの謝肉祭」として熱気あるその様を活写している。(88年2月)

ゲートは画家ティッシュバインの世話でこのコルソ通り十八番地の館に住むことになった。この家のゲートが居住した部分は現在「ゲート博物館」として



整備され、当時の様子をしのぶことができる。以後ティッシュバインは、観賞と実作の両面においてローマにおける美術修行のよき導き手となった。

今ここに彼の手になる、宿の窓から外を眺めているゲートを描いたスケッチがある。(図1) 旅装のガウンを脱いだばかりと思われる姿で、半分開いた窓から身をのりだすようにして一心に外を見ているゲート。この後ろ姿を見ていると、「ついにこの世界の首都に到着した」感慨をかみしめているその胸の高鳴りが聞こえてきそうである。

それ以後彼は約15ヶ月間にわたってこの宿

を基地として町へ繰り出し、「晩になると、観賞と驚嘆のためくたくたに疲れ切って」(同)しまいながら、あらゆるものをあの大きな目で探索した。

この町では日常の景観の中に古代がとけ込んでいる。その中を、「古いローマと新しいローマの地図を頭にいれて、廃墟、建造物を眺め、あれこれの別荘をおとずれる」日々。(86.11.7) しかし、無惨な姿をさらす古代の栄光の遺構を眺めることは、たしかに心いたむ光景でもある。「新しいローマから古いローマを選び分けることは困難な、それに悲しい仕事」であった。以下いくつか、ゲーテとともに古代の遺跡を歩いてみよう。

パンテオン

古代ローマ建築のなかで、ほぼ完全に往時の姿をとどめているものはこのパンテオンのみである。球形を設計の基本とし、コリント式円柱による前陣を付している。アウグストゥス帝の時代に、マルクス・アグリッパ將軍によって建てられたが、現在の姿に修復されたのはその1世紀後の、ハドリアヌス帝の時代であるという。名前は「すべての神々のための」神殿を意味する・・・等の説明はガイドブックを読みたい。キリスト教の寺院となったことで破壊を免れて中世を生き延びた。

ゲーテはこのパンテオン＝ロトンダ(円形建築の呼称)を、古代の貴重な遺物としてつねに最大の畏敬の念をもって眺めている。「当地ではロトンダが、その外も内も、その偉大さのためにぼくの心に喜ばしい尊敬の念を起こさせた。」(86.11.9.) また、同年12月3日には次のように記している。「なんといってもこれらのすばらしい対象は、ぼくには依然として新しい知己のようなものだ。これらのものと共に生きずして、その特質をつかんだことにはならない。そのあるものはぼくらを圧倒的な力でひきつけ、そのためしばらくは他のものに対して無関心になったり、いや不公平になったりさえする。たとえばパンテオン、ベルヴェデーレのアポロン、二、三の巨大な頭部彫刻(中略) そういうものがぼくの心を占領してしまい、それとならんで他のものはほとんど何も眼にとまらないほどであ」った。

ちなみに、これもガイドブック的事項であるが、パンテオンの円屋根は、ミケランジェロによってヴァティカンのサン・ピエトロ寺院の建築意匠としてルネサンス時代にまさに「再生」し、以後多くの教会の屋根を飾ることとなった。ボボロ広場にある二つのサンタ・マリア教会、サン・アンドレア・デッラ・ヴ

アレ教会等々、ローマのシルエットの重要なポイントである。

フォロ・ロマーノ

古代ローマの政治と市民生活の中心であったフォロ・ロマーノは、今でこそ遺跡として整備されており、ほとんど原型をとどめない建物遺構の中を歩きながらも、復元図を手に想像力を働かせれば往時の姿をたどることができる。ゲートの時代には、ここはまだ半分以上が土にうまっており、草原ともなつての



(図2) ピラネージの描く「カンポ・ヴァッキーノ」の図。手前にセヴェルス帝の凱旋門、中央右寄りに、カストルとポルックス神殿の三本の柱、後方左寄りにコロセウムの壁の一部がのぞまれる。

どかに牛たちも放牧される場所であったようだ。その名もカンポ・ヴァッキーノ（牡牛の原）と言った。そのありさまを伝えるピラネージの上掲の絵は、ローマに関する多少とも詳しい本を開けば必ずどこかで目にとまっていることであらう。

本来は諸丘に取り囲まれた低湿地であったのを、排水設備を整えて次第に公共広場として整えられた場所である。これは「クロアカ・マッシモ」(大排水渠)といい、ローマを去る直前にゲートがぜひ眼にしておきたいと、見届けた遺構

であった。(88.4. 報告)

それに少し先立つ二月、ローマ滞在も残り少なくなったある日のこととして、カピトリノの丘の館の一室から落日のフォロ・ロマーノを眺めた忘れがたい思い出が記されている。それは「この世に二つとない景色」であり、「落日の夕映の中に(中略)あの雄大な画図を見渡すことができるのは、はかりしれないほどの享樂」であった。晩年に彼は、これを鳥瞰した、別の画家による銅板画を購入している。⁸⁾

フォロ・ロマーノにすぐ隣あって、「皇帝たちのフォルム」が並んでいる。トラヤヌス帝のフォルムは北辺を占めていたことになるが、その中心にあった記念柱が今に残り、40メートルの高さをもってこのあたりの景観のアクセントをなしている。円柱の外周は、この皇帝がダキアを征服した事績(紀元101-103, 107-108)をしるした浮き彫りで覆われており、その全長は200メートルにおよぶという。柱頭にはもちろんトラヤヌス皇帝の彫像が立っていたのだが、世はキリスト教の時代となり、現在そこにあるのは聖パウロの像であるらしい。中は階段になっていて、ゲート時代は立ち入り制限はなく自由に登ることができたようだ。「夕方トラヤヌス記念柱に登ってすばらしい眺望を楽しむ。そこから見下ろすと、沈み行く陽に照らされてコロッセオがまことに見事な眺めである。カピトリノ丘もごく近く、そのかげにパラティーノ丘があって、市街がそれに続いている。」(87.7.23) われわれは、当時の画家ピラネージやヴァージの描いた図を手に取りつつ、想像によってこのすばらしかったにちがいない景観を思い描くほかはない。

フォロ・ロマーノからは西に仰ぎ見られるパラティーノの丘は、かつて最も広大な宮殿・邸宅の立ち並んだ場所であるが、今はその廃墟を松の木陰にたどるのみである。ここを散策して感慨に打たれない人はいない。ゲートの記述は86年11月10日、87年9月の報告などにみえる。頽れた廃墟の壁を描いた、水彩とおぼしき彼のスケッチも残されている。⁹⁾

コロッセウム

コロッセウム、正確には「アムフィテアトルム・フラヴィウム」、すなわち皇帝フラヴィウスの創建になる円形劇場。ネロ帝の庭園の一部をなす円池を浚渫して作られ、傍らに彼の巨大な像「コロッスス」があったことからこの俗称で呼ばれるようになった。ただひたすらに巨大であり、「この円形劇場を眺めると、

他のものがすべてまた小さく見えてくる」(86.11.11)。これほど圧倒的な印象を与える「廃墟」も類を見ず、ローマ観光の不変のシンボルである。

Qaumdiu stabit Coliseus stabit et Roma;
Quando cadet Coliseus cadet et Roma;
Quando cadet Roma cadet er mundus.

「コロッセウムが立つ限りローマも立つであろう。コロッセウムが倒れればローマも倒れるであろう。ローマが倒れれば世界も倒れるであろう」とは、ヴェネラービリス・ベダ (Venerabilis Beda, 672–735) の言葉と伝えられる。

その昔この空間で行われていたことは、¹⁰⁾ まず動物ショー。ローマ人の征服世界が広がるにつれ、猛獣、珍獣も多く知られるようになった。それを華やかに飾り立てて行進させるのなどはまだ良いとして、樹木や噴水で自然を演出し、そこに放った動物たちを追い立てたり狩りをしたりすることが人気プログラムとなっていた。猛獣に人間（たいていは自信のある剣闘士）を立ち向かわせる闘いもあった。

訓練を受けた職業剣闘士同士の戦いや、猛獣同士を戦わせたりなどはまだしも、罪人の処刑として生きた人間を猛獣の前に放ち、逃げまどいついには身体を食いちぎられる様に数万の群衆が喝采をおくっていた。人間の残酷な一面を証言する建造物であるには相違ない。ディケンズの一節を引用しておこう。

Never, in its bloodiest prime, can the sight of the gigantic Coliseum, full and running over with the lustiest life, have moved one's heart, as it must move all who look upon it now, a ruin. GOD be thanked: a ruin! ¹¹⁾

しかし、コンスタンティヌス帝の剣闘士禁止令（325 年）以後、コロセウムがそうした目的のために使用されることはなくなっていき、無用の巨大建築は中世以降は格好の石切場となった。手入れもされず草むす姿をさらしていたゲート時代のコロッセウムに、時代の趣味は逆に「廃墟」としての美を感じるようになっていた。古代の廃墟は当時の風景画の格好の画題である。1787 年 2 月 2 日。「満月の光を浴びてローマを歩きまわる美しさは、実際にそれを見た人でなければ想像もつかない。(中略) わけても美しい眺めはコロセオである。それ

は夜には閉鎖されるが、一人の隠者がこのなかの堂のかたわらに住んでいるし、乞食らが崩れ落ちた円蓋建築のなかに巣くっている。」その彼らのたく火の煙が、月光のもと廃墟に立ち上る様を眺めるゲーテ。整備が行き届き、夜にはライトアップされ、深夜まで交通の騒音がやまない現代にあっては、たとえ満月の夜といえどもこの雰囲気を追体験することはむづかしいが。

アウグストゥスのマウソレウム

マウソレウム (mausoleum) とは、ペルシャの太守マウソロスにちなむ名で、大規模な陵墓を意味する。アウグストゥス帝（とその一族）の陵墓は、当時はまだ城外であったカンパス・マルティウスのはずれの地に作られた。中の円筒形状の構築物の上に土盛りをした構造であったが、歳月を経て土盛りも消失していたようである。今日ではもちろん史跡として整備されているが、ゲーテ当時の様子は次の記述でうかがうことができる。

今日はアウグストゥス帝の霊廟で動物の狩りたてがあった。この大きな、内部はからで屋根のない、まんまるい建物は、いまでは一種の円形劇場のように、競技場や野牛狩用に設置されている、四、五千人は収容できるだろう。見せ物それ自体はそれほどぼくを喜ばせなかった。(87.7.16)

アウグストゥスのオベリスク

アウグストゥス皇帝は「平和の祭壇」に隣接する地に巨大な日時計を築き、エジプトから招来させたオベリスクを建ててそのための柱とした。¹²⁾ のちにこれはいつしか地中に埋もれていたのが、1748年に発掘されていた。ゲーテのローマ滞在のころにはまだ、「ある中庭のがらくたや泥のあいだに、壊れたまま横たわって」いた(87.9.1)が、法王が再び組み立てて直立させる工事を行うと噂されていた。ゲーテはその現場を訪れて、刻まれている象形文字などの「はかりしれぬほどの価値ある物を」石膏に取らせて保存した。このオベリスクは今日、コルソ通りからもほど遠からぬ、ピアッツファ・ディ・モンテチトーリオに立っている。

ハドリアヌスのマウソレウム¹³⁾

ヴァティカンにほど近く、テベレ川に陰を落とす聖天使城(カステル・サン

タンジェロ)は、元来はハドリアヌス帝(138 没)の霊廟であった。中世には要塞としても使われた。6月29日、聖ペテロと聖パウロの祭日にここから打ち上げられる花火の光景はよく古図にも描かれている。ゲートはシチリアの旅から帰った6月に「まるですばらしい童話のようで、われとわが眼を疑うほど」であったと記している。

ヴィア・アッピア

イタリアのゲートを描いた肖像画で最もよく知られているのが、ティッシュバイン描くところの「カンパーニャのゲート」であろう(図3)。遺跡のかたわら、石の断片の上に座して遠くを見やっているゲートの背景には、アッピア街道が描かれている。遠くの山並みは、サン・ピエトロの屋根からも望まれ(86.11.20)、またしばしば訪れもした「アペニン山脈の明美な地域」であろうが、



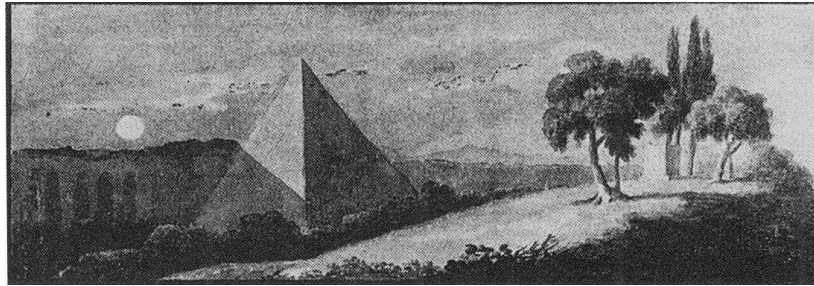
特徴的な「メテッラの墓」が描かれていることでアッピア街道であると知れる。これは「堅牢な城壁というものの概念を初めて与えてくれる」遺構であったが、後世の破壊と略奪の手は免れることはできなかった。「あの人たちは永遠のために作業をした。あらゆることが計算に入れられていたが、破壊者の無謀だけは考慮されなかった。これにはどんなものでも降伏するしかなかった。」(86.11.11)

同じ日この街道に沿って、「カラカラ帝の競馬場」(今日ではマクセンティウ

スとされる)「荒廃した墓地」などを見ている。

ケスティウスのピラミッド

ゲーテが訪れた古代遺構は他にも多いが、最後に「ケスティウスのピラミッド」を見よう。市の南部、サン・パウロ門に隣接して立つ、アウグストゥス帝時代の同名の人物の墓である。86年11月10日、87年12月の報告などに言及があるが、それよりも彼自身の手になるスケッチは印象深い。「ケスティウスのピラミッド、墓とともに、月夜」と題されたものである(図4)。この、ゲーテの素描に描かれた、ピラミッドに並んで立つ「墓」は彼自身のものを想定したものであるという。¹⁴⁾



現在この地は「プロテスタント墓地」として、非カトリック教徒、とくにこの地に没した外国人の墓地として整備され、行き届いた手入れがなされている。詩人キーツ、シュリーマンの妻ソフィア、イタリアの革命思想家グラムシなども眠る中に、ゲーテの息子アウグストの墓もある。その墓標には、浮き彫りの肖像の下に、次のように刻まれている。

GOETHE FILIVS
PATRI
ANTEVERTENS
OBIIT
ANNOR. XL
MDCCCXXX

ゲーテ 息 / 父に / 先立ちて / 死す / 享年 40 / 1830 年

古代美術品

ルネサンス・バロックの美術も精力的に見ているが、それ以上に熱心に見たのは古代美術、すなわちこの場合はギリシャ彫刻である。すでにして古代のローマの町では、公共施設や宮殿が無数のギリシャ彫刻（オリジナルあるいは多くはそのコピー）で飾られていたことは、例えばプリニウスの博物誌にもその記述がある。¹⁵⁾ その後の滅亡と略奪のなかで、多くは失われ散逸したであろうが、時を経て、偶然と幸運との重なりによって地中から掘り出されて日の目を見たものも少なくない。1506年1月、コロセウム近くの丘で発掘されたラオーコオン像の発見は最もドラマティックな出来事であるが、それ以外にも著名な作品が姿を現しつつあった。またこの時期、ポンペイの発掘作業も始まっており、出土品が出回りつつあった。ギリシャ美術愛好者としてそれらを求めあるいは商う人々にとって、ローマはさながら宝の山であったと言ってよい。人々はギリシャ彫刻を見るためにローマに行った。ギリシャ本国は遠く、また当時はオスマン・トルコ領であり、そこに旅をすることは経費の点からも危険度の点からも一般のヨーロッパ人にとっては望み得ないことであった。

したがって十八世紀半ばのローマには美術品を扱うブローカー達も多く暗躍、いや活躍し、すぐれた古代彫刻をヨーロッパ各地にせっせと流出させた。そうした美術商の一人が前述のジェンキンス氏であった。

また、帰国の迫ったゲートにも、オリジナルの彫像の提供がもちかけられたことがある。当初は非常に乗り気であったゲートだったが、真贋のリスクを伴うことがらだけに、友人アンゲーリカ等の慎重な忠告もあって結局は断念した。それが、あの「うずくまるヴィーナス」像であったことと思えば、たとえローマ時代の模刻とはいえ、「その彫像がやがて大いに名声を博するにいたった」(88.4.報告)ものであっただけに、惜しいことではあった。¹⁶⁾ 当時はまだこのようなチャンスは誰にも巡ってくる可能性はあったであろう。

ローマのなかでも、ラオーコオン像を手に入れた法王ユリウス二世以来、歴代の法王たちは出土した古代彫刻を熱心収集したので、ヴァティカンはやはり最大のギリシャ彫刻の宝庫である。ゲートも足繁く通った。ヴァティカン所蔵ではまずなによりもアポロン像。「サン・ピエトロでは、芸術も自然も、あらゆる尺度の比較を超越しうることを理解するようになった。かくてベルヴェデーレのアポロンはぼくを現実界から拉し去った」(86.11.9)。またその他には、ラオーコオン群像、さらに、ミケランジェロにも多大の影響を与えた「トルソ」

など。

87年11月の「報告」には、ヴァティカンとカピトリノ美術館の古代彫刻を松明のあかりで鑑賞するという趣向の催しに参加したことが語られている。漆黒の闇の中から、松明の明かりに浮かび上がる彫像は、白昼の光のもとで見るときとはちがって、「作品のあらゆる微妙なニュアンスがはるかに明瞭に」なるのであった。さきのトルソ像においてはこれが最も顕著に感ぜられたと報告している。

枢機卿や貴族たちもこぞって収集につとめたので、個人蔵に帰す作品も多く、それらはたいてい所有者の名前をもって、たとえばルドヴィージのユーノー像、などと呼ばれた。

昨日は、原作がヴィラ・ルドヴィシにある巨大なユーノーの頭部の模像を広間に据えて、さわやかな気分になった。これはローマにおけるぼくの最初の恋人であったが、いまはそれがぼくの手にある。どんな言葉もこれを言い表すすべがない。それはホメロスの歌のようだ。(87.1.6)



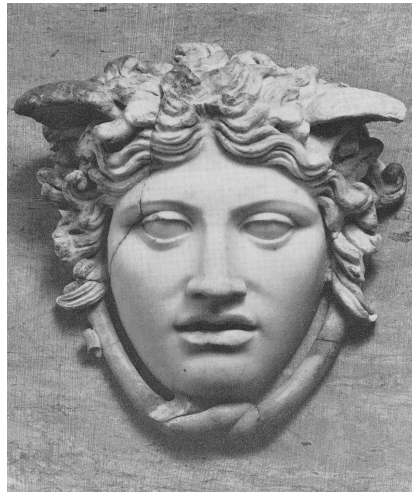
ゲーテの日常をスケッチしたティッシュバインの絵のひとつにも、部屋の中央に置かれたこのユーノー像が認められる。

今日ゲーテ博物館を訪れる人は、ゲーテが「朝、眼をあけると、すぐれた作品によって感動させられ」た(88.4. 報告)この像を眼にすることができる

(図5) ゲーテが帰国に際してアンゲーリカに託しておいたものが、曲折を経てもとの最もふさわしい場所に帰っているのである。

その他、彼が石膏模像を手許において愛惜していたものには、「ロンダニーニのメドゥーサ」像もあった(図6)。

これは死と生、苦痛と快樂とのあいだの軋轢を表現しながら、ちょうど何か他の大問題のように名状しがたい魅力をぼくたちにおよぼす不思議な作品である。
(同)



ゲーテはイタリア旅行当初、「ライプチヒの商人ヨハン・フィリップ・メラー」と名乗って微行の自由を享受していたが、知人ライフェンシュタイン宮中顧問官のすすめで貴族に「格上げ」され、「ロンダニーニ向かいの男爵」“der Baron gegen Rondanini über”と称した(86.11.8)。というのもコルソ通りの宿の向かいがパラッツォ・ロンダニーニであったからである。そのロンダニーニ家がこのメドゥーサの仮面を所蔵していた。これは本来、巨大な女神アテナ像のもつ盾に彫られたメドゥーサの顔で、とすればオリジナルはフィディアスの手になるはずである。ローマ時代の模刻6体のうちのひとつであった。古典期の香気を伝え、「その気高く美しい顔かたちのなかに、不安げな死の凝視が言いようもなく巧みに表現されている」。(86.12.25)

ちなみに、ロンダニーニ家にあった像のほうはその後バイエルン侯の所有に

歸し(ゲーテは晩年ふたたびそれをもとに模刻を作らせた)、現在はミュンヘンの古代美術館 Glyptothek の貴重な収蔵品である。

ローマとの別れ

1788年4月23日、多くのものを見、無限の収穫をもってゲーテはローマをあとにする。折しも満月のもとで「壮麗に準備された」最後の夜に、彼はやはり古代遺跡に足を運んでローマとの別れを惜しんだ。「魔宮のように荒野に立っているカピトリノー丘に登」り、フォロ・ロマーノへの階段を下りていった。そしてコロセウムの「崇高な遺跡に近寄り、閉ざされた内部をのぞきこんだ」りした。そして脳裏を去来したものは、遠く追放の身となった詩人オヴィディウスのローマを想う望郷の詩であった。

ローマを去りなんとする最後の夜の
悲しき街の姿、わが心にたち現れ、
なつかしきものの数々と別れしかの夜を想い起こせば
いまもなおわが眼より涙のほほをつたう。

インターネット

馬車で旅をしたゲーテ時代の人々と異なり、現代のわれわれは「電子の」旅もする。今日、インターネットにもいくつかの古代ローマ・ヴァーチャル・ツアーが提供されているが、われわれのテーマにぴったりのサイトを紹介して本稿を終わりたい。

“What J. W. Goethe saw during his stay in Rome”¹⁶⁾

がそれである。ゲーテが訪れた場所が日ごとに記され、当該対象をクリックすると当時の画像と地図、そして現代の姿(写真)とを比較して見ることができるものである。このゲーテ・ツアーのガイド氏は自らも十八世紀風の服装に身を包んで写真に収まり(ただし靴は20世紀のものようだ)われわれを出迎えている。さらにこのサイトで非常に得難いものは、Grand View of Rome として、ヴァージの詳細きわまるローマ絵図が付随していることである。現在は複製でもかなり高価なこの絵図を細部まで見ることは大きな魅力であ

る。

注

- 1) 『イタリア紀行』からの引用は、「ゲーテ全集」(潮出版社、1979)第11巻の高木久夫訳によった。原書はハンプルク版ゲーテ全集の第11巻所収のものを用了。
- 2) LOEB CLASSICAL LIBRARY 133, Livy: History of Rome Books 3-4 などて読むことができる。
- 3) グスターフ・シャルク『ローマ建国物語 - 神話から歴史へ - 』角信雄、長谷川洋訳(白水社、1968)など。
- 4) 参考文献 3, 20 頁、等。
- 5) Guide de Tourisme MICHELIN Rome. 各国語版もある。
- 6) これについては、本城 靖久『グランド・ツアー - 英国貴族の放蕩修学旅行』中公文庫 (1994)。
- 7) 復刻版は、Johann Caspar Goethe: Reise durch Italien im Jahre 1740. Viaggio per l'Italia. dtv. 1986.
- 8) 1828 年のことという。上掲高木訳書 521 頁の注による。上掲ハンプルク版全集の 496 頁に転載あり。
- 9) この記述は、主として下記参考文献 2 による。
- 10) *American Notes and Pictures from Italy*. The Oxford Illustrated Dickens. London: Oxford University Press, 1966. 367.
- 11) 参考文献 1, 127-8 に詳しい。
- 12) 須賀敦子『ユルスナールの靴』(河出書房新社、1996)には内部構造を詳しく巡った記述がある。
- 13) 上記高木訳書 520 頁、図版 73 の注による。
- 14) 『博物誌』36 巻 35 章以下、等。
- 15) 現在この像はヴァティカン美術館にある。
- 16) <http://www.romeartlover.it/Goethe.html>

参考文献

古代ローマ市の都市構造やその遺跡については主として次のものを参考にした。その他、一般のローマ案内書は割愛する。

1. 青柳正規『皇帝たちのローマ』中公新書、1992。
2. Herbert Alexander Stützer: Das antike Rom. (DuMont Kunst-Reiseführer) Köln 1979.
3. 小森谷慶子、小森谷賢二『ローマ古代散歩』新潮社、1998。

ゲーテのイタリア紀行については次の書がバイブルである。

- 4 菊池栄一『イタリアにおけるゲーテの世界』内田老鶴圃 昭和 36.

図版について

公開講座においては多くの図版、写真をスクリーンに投影して用いた。本稿では最小限にとどめたが、次から転載した。

- (図 1) Franco Paloscia: Due passi a Roma con Goethe. Milano 1997.
- (図 2) La Roma di Piranesi. Milano 1999.
- (図 3) 高木昌史『ゲーテと歩くイタリア美術紀行』青土社 2003。
- (図 4) 上記ゲーテ全集。
- (図 5) Hans von Hülsen: Römische Funde. Göttingen 1960.
- (図 6) Glyptothek München. Ein kurzer Führer von Dieter Ohly. München 1974 (3).